

氏名	大鷹 涼子
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 4029 号
学位授与の日付	平成 21 年 9 月 30 日
学位授与の要件	文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	夢野久作『ドグラ・マグラ』生成論
学位論文審査委員	主査・准教授 山本 秀樹 教授 田仲 洋己 准教授 西山 康一 鶴見大学教授 片山 倫太郎

学位論文内容の要旨

本論文は、奇作として夙に名を馳せる昭和 10 年(1935)1 月刊夢野久作『ドグラ・マグラ』に関して、初の実証的研究操作をほどこすものである。

『ドグラ・マグラ』は書き下ろし単行本として刊行されたが、その起筆は遅くとも大正 15 年(1926)と見られ、執筆期間は少なくとも 10 年という長期にわたる。その間、数次にわたる改稿が行われたことが、日記の記事によりすでに知られているが、本論は実際に福岡県立図書館杉山文庫に残されている『ドグラ・マグラ』の草稿(2798 枚)を活用して、その改稿過程をつぶさに検討する。また、これまでに活用されたことのない同文庫所蔵の作者宛の編集者書簡を利用して、『ドグラ・マグラ』の改稿過程を復元しようとする。

本論の前半部(第一～三章)では、まず、作者の日記、作家・編集者などと交わした書簡を用いて『ドグラ・マグラ』に関する起筆から刊行までの経緯を明らかにする。

第一章では作者宛佐々木俊郎(編集者)書簡によって、作者の日記が現存しない昭和 5 年以降の『ドグラ・マグラ』の状態について考察する。また、刊行書店松柏館書店(春秋社)社主神田豊穂・その息子澄二書簡によって、『ドグラ・マグラ』の校正、および出版記念会等、その刊行前後の様子・時代状況について明らかにする。

第二章では、新出資料、佐々木俊郎書簡の裏に記された作者の返信下書きメモを使用して、『ドグラ・マグラ』の起稿年を確定的にし、その頃の作者の状況について述べる。

第三章では、『ドグラ・マグラ』執筆初期の作者宛川田功(編集者・作家)書簡を用いて、『ドグラ・マグラ』執筆初期段階の作品構成について明らかにし、作者の改稿作業、およびその執筆方法について考察する。

本論後半部(第四・五章)では、『ドグラ・マグラ』草稿を使用し、その生成過程につ

いて考察する。

論文・祭文・遺言書など複数の独立テキストが挿入される『ドグラ・マグラ』は、各テキスト複数次にわたる改稿清書がなされていることが確認でき、それぞれのヴァリエントが複数残されている。

第四章においては、伝残草稿のすべてについて検討、単純に清書が行われただけの草稿類も多数含まれていることが判明するが、草稿のうち特に重要と見られる改稿について論じ、第五章において、『ドグラ・マグラ』の改稿過程分析に基づいて、他作に比して『ドグラ・マグラ』に極めて特徴的なその構成的問題（円環構造を構築する冒頭末尾表現のくりかえし、交換可能性の示唆、書かれたものによる世界の構築、等）について論ずる。

結果、『ドグラ・マグラ』を、ある事件の犯人を追究する探偵小説的性質を持ちながら、語り、聞き、書き、読むことにおける主体とその行為の結果として生まれた「書かれたもの」をめぐる尖鋭的批評性を持った物語であると結論づける。

学位論文審査結果の要旨

学位審査会の結果、本論文を博士（文学）学位に値するものと見ることで、審査委員全員の意見の一致を見た。

理由を以下に述べる。

本論文は、奇作として夙に名を馳せる実験小説、昭和10年（1935）1月刊夢野久作『ドグラ・マグラ』に関して、初めて実証的研究操作をほどこすものである。

その膨大な草稿原稿・編集者が作者に宛てた書簡群が福岡県立図書館杉山文庫に所蔵されることは、すでに知られてはいたが、これまでにいわゆる研究者と言える人間でその全てに眼を通した人間はおそらくはおらず、いわんやこれを用いた研究は皆無であった。

本研究はそのような研究状況に一石を投ずる、膨大な資料を用いた膨大かつ綿密な労作的試みであり、オリジナリティのある立派な仕事であり、力作である。本論 249 ページ。学位請求論文には、さらにその後、ページの付されていない附属資料数十ページが付される。

もちろんフロンティア的仕事の必然としてまったく問題を含まないわけではない。

本研究は、資料の翻刻と作品の形式的構成から攻める論文であり、その線において一貫しており、まとまりもあり、完結性も高いが、その裏を返せば、惜しむらくは内容的なつつこみにおいて飽き足りないところがある。特に作者の思想性、作品の思想性の検討の高みにまで、考察の手が及ぶことを読者としてはどうしても期待するところであるが、本研究においてはそこまでの検討記述はなされていない。

だが、それはこの学位請求論文においては述べ得なかった課題として、学位請求者も認識しているところであり、学位請求者の今後の課題に属すると言って好い事柄である。

本研究は、今後『ドグラ・マグラ』に関して論じようとする者が必ずこれに眼を通さな

ければならない研究の礎石を築いたものとして、その価値は否定しがたいものである。

なお、その瑕瑾に関する局部的修正が求められたことも、審査結果の要旨としては記さざるをえない。

誤植が多い。若干箇所について、その使用法に日本語として適切とは言えない語の選択がなされている。考察の細部について、考察の誤りではないが、他の可能性をも考え得る箇所若干が存する。一箇所、資料中の一単語を明らかに誤解しているため、それに連動して考察の部分的修正が必要である。

しかし、以上の瑕瑾が、本研究の価値の本質を損なうものでないことは明白である。